



宮城県助産師会便り



20110620 発行第4号

ご報告

平成23年度一般社団法人宮城県助産師会紙上
総会の決議事項は、全会一致で承認されました。

一般社団法人宮城県助産師会機関紙

230311大震災から3か月

未曾有の大震災に助産師の社会的使命を感じ・・・

新田みつ子 後藤美子 石川初枝 後藤あき子 山岸和子 田村雪子(文責)

2011年3月11日14時46分マグニチュード9.0という、未曾有の大震災に襲われた。これに伴う津波は、岩手県宮古市の38mを最大に、市が壊滅的被害を受けた南三陸町15m、宮城県仙台市新港8m、市の60%が被災した石巻市5m、岩沼市仙台空港12mと報告されている(港湾空港技術研究所と都司嘉宣・東大准教授の調査による)。この災害における死者5110人、行方不明者5223人、全壊家屋68810軒(警察庁緊急災害警備本部発表2011,5,28)、日本観測データ史上発の大震災といわれている。宮城県は北は気仙沼市から南は山元町までの沿岸地域すべてが地震と津波、内陸部は地震による甚大な被害に見舞われたが、会員に死者はなかったことが、不幸中の幸いであった。



お礼

①(社)日本助産師会のML

会員の安否確認に活用させて頂いた。

助産師会に届いたほしい支援物資の発信が出来た。

②全国の助産師会支部及び会員

①の情報発信にすぐ対応して頂き、発信者にすぐ届けることが出来た。

全国から宮城県営業所のミルク会社に集配手続きを取って頂いた。支援物資の集配センター着可である情報も提示頂いた。(物流が停止しており、第1便着が2週間後であった)

③ご支援頂いた団体

(社)日本助産師会、東京都助産師会、各県助産師会支部及び会員、日本財団ロードプロジェクト、国際NGO団体ジョイセフ支援物資提供、プランタン銀座、鎌倉ティアラの会、アイクレオ、明治乳業、井原繊維、宮城根っこ会。

この場をお借りしお礼申し上げます。

被災事の宮城県助産師会会長(代表理事)

声明と各助産師の行動

「自分が出来る事をそれぞれ自己責任の元にやりましよう」

事務所の電気、水道が復活した3月14日、3日目、電気が復旧し光フレツを繋げたことから、宮城県助産師会の活動を開始した。新田代表理事(会長)は「自分が出来る事をそれぞれ自己責任の元にやりましよう」と声明を出した。これは被災が大きく団体として機能することは不可能と判断しての発表である。このことはHPで会員に掲示した。事務所管理は理事で対応し、会員の安否確認から始め、母子の相談業務・乳幼児の入浴サービス(電気と共に水道も復旧)を開始した。

ライフラインの断絶は宮城県全般に及び、今も復旧していない市町村がある。

会員はライフライン消失、ガソリンなし、食料は備蓄のみの状況で、それぞれが家庭を守ることと、職務を全うすることで精いっぱいであった。今回の被災において、

理事・開業助産師・新生児訪問指導員・休講体制になった非常勤講師等が中心になり活動した。米がない会員

にリュックサックで持参など、支え合いの光景がたくさん見られた。勤務助産師は、被災当日、粉雪が舞いガレキが散在する道を2時間歩いて職場に向かい、暖房が消えた産科病棟で分娩に向かい合った。宮城県内の沿岸部の産科クリニックは壊滅状態に陥り、お産は大きな総合病院に集中し、その中、不眠不休で母子支援を続けた勤務助産師の疲労は図りしれない。

また、地元に着していた開業助産師の活動は、目を見張るものがあった。多賀城のナーシング助産院を中心にした避難所の訪問、支援物資の配



静岡県支部からの支援物資「大丈夫やで」

布、元気市(母子への支援物資配布)の開催は、多くの母子を救った。宮城県亘理町のマミーぱいぱい出張助産師、岩佐あけみ氏は、自ら被災し避難所にいながら、行政スタッフと共に支援活動を行った。多忙

被災お見舞い申し上げます

以下の会員は、今震災に置いて被災致しました。お見舞い申し上げますとともに、日本助産師会のお見舞い金及び宮城県助産師会からのお見舞いの品をお届け致しました。

新田みつ子 後藤美子

- ・伊藤祝子様 (柴田町)
- ・岩佐あけみ様 (亘理)
- ・遠藤幸子様 (ゆり上)
- ・小田嶋清美様 (石巻市)
- ・片桐包子様 (仙台市宮城野区)
- ・木村敬子様 (石巻市)
- ・齊藤清子様 (石巻市)
- ・齊藤つみみ様 (東松島市)
- ・鈴木智子様 (仙台市宮城野区)
- ・中濱秀子様 (石巻市)



な保健師さんとともに、把握可能な妊産婦さんの訪問活動を地道に続けた。又、母子への支援はガソリン入手後に避難所や地域の皆さんの情報を基に活動できる会員が支援物資を直接届けた。

保健指導部では、震災後新生児訪問指導が2か月間停滞していた地区が多く、この間、会員の安否確認と共に、それぞれの避難所・地域での支援活動、事務所に届く支援物資搬出活動に率先して関わった。

被災時作製した資料

- ①行動記録 → 後日パソコンへ入力
- ②支援物資受け入れ簿 → 後日パソコンへ入力
- ③乳幼児の風呂利用説明書と承諾書利用簿
- ④電話相談用紙の活用



宮城県助産師会としての気づきと

今後の課題

- ①緊急時の指令系統を発令し統一させておいたのは、理事の動きを制限しなかった。
- ②宮城県助産師会が社団化を取得(2010、1)しておいたことは、財源確保に必須であった。
- ③緊急時は、メールが最大の通信手段、次は携帯電話である。

被災間もない日数での電話によるお見舞い挨拶は不要である。必要項目のみ伝えるだけでよい。

④団体・個人からの支援物資について

- ・被災県、助産院にとって、時期、その量は適切であったか議論を進め、今後に生かすべきと考える。
- ・他県からの支援がままならない期間(約2週間)を乗り切るためには、日頃の近場の関係を良好にしておく必要がある。
- ・被災日数とともに変化する支援物資の内容
ミルク・紙おむつ・離乳食→下着・乳幼児衣類→財源→心のケア→次に個別支援
- ・支援物資は、被災県の承諾を得てから発送して頂くと助かる。
- ・母子への提供が困難であり、腐敗の危険を考え食料の支援依頼はしなかった。しかし全国の先生たちからの支援物資の隙間に入れて下さった、大根・漬物・アルファ米、インスタントコーヒー・お煎餅・生姜湯・カリントウ等、助産師魂と母をも感じ、リラックス出来た瞬間であった。

⑤事務所に待機し、対外折衝をする固定した人材の確保が必要である。今回は携帯転送をフル活用し対処した。今担当者は、現場支援に関わるとその悲惨さに、正常な判断能力が出来なくなる考え、行動は必要最低限とし情報収集と発信を行った。

⑥報道対策として、各団体が報道機関に情報を提示するときは、多忙でも、電話・メールが復旧した時点で、被災県、また当事者の承諾を得る必要があろう。

常備しておきたい災害対策グッズ

- ・会員のメールアドレス、携帯電話番号
- ・助産師ゼッケン

(被災後2か月にてジョイセフさんから支援頂き、ピンポイントに配置した)

- ・多少のミルク・紙おむつ・お尻ふき・乳幼児は肌着、乳幼児服
- ・真摯に誠実に向かい合う団体のビジョン

⑦災害時の助産師のボランティアは必要である。助産師の知恵は被災地に存在するだけで母子支援に繋がる。こ

のことは今震災で実証された。しかし、被災県の助産師は家庭と職場を守ることで精いっぱいである。宮城県助産師会が動ける助産師の必要性を感じたのは、被災後3日目、県内避難時に配置は難しくても、訪問を定期的にしたと考えた。が被災県における人材の確保は難しい。加えて、被災県は緊急のボランティア受け入れ体制の構築、財源はないと考えるべきであろう。交通・宿泊・食事の確保をして、適時に被災地に入るスタイルを団体として構築していくべきと考える。また、無償ボランティアには限界がある。災害時ボランティア基金の確立も必要であろう。タイムリーに機能できる団体であってほしい。

今後の事業展開

(社)日本助産師会、東京都助産師会、日本財団ロードプロジェクト、日本財団助産師による産後支援事業、国際NGO団体ジョイセフ産後支援事業の助成を元に、以下の事業を展開する。この投稿が皆様の手元に届くころは、初期報告が出来るかと考える。

- ①宮城県内外の産後の助産院及び収容施設における入所サービス
- ②被災母子への家庭訪問事業
- ③被災者への助産院における保健相談及び、乳育児支援事業
- ④出産後施設退院者へのプレゼント及び情報提供事業

最後に

今震災における助産師による母子支援は長期化するものと思われる。会員一同意志を統一し、真剣に被災母子に向き合う姿勢が求められる。最後に会員の皆様には、ねぎらいの言葉とお礼を申し上げ、今後へ向けて、余力を蓄えておいて頂くことをお願いしたい。



本部災害対策委員企画
「被災後の心のケア」
参加風景 2305

平成23年度社団法人日本助産師会全国総会参加報告(福井県)

宮城県代議員 助産所部会 伊藤朋子

平成23年度日本助産師会総会が福井県にて開かれました。震災により仙台空港が使えず、陸路7時間の長旅となりました。会場となった三国は、14年前にタンカー座礁による重油汚染事故があったところです。厳寒の日本海の海岸で全国のボランティアが、オタマで黒いドロドロの重油をすくっている映像をテレビでみた方も多いかと思います。今はすっかり美しい海を取り戻し、おいしい海の幸をたっぷりいただいてまいりました。今回の東日本大震災で、私たちも全国からの支援に支えられ、自らもボランティアとして出動しています。この三国の美しい海をみて、復興後の宮城の地に思いをはせました。

5月26日の理事会には後藤美子副会長が出席。助産所部会集會に伊藤朋子・早坂ひかり・山口之雪の3人が参加しました。

「思ったより元気そうね。」「大変だったでしょう。」と沢山の仲間たちよりお声掛けいただき、嬉しかったです。



「母乳育児支援のガイドライン」のうち「乳腺炎」のプロトコールが作成され、「近日中に、ホームページにアップすると同時に、冊子になるのでまずは使ってみてください。」と説明がありました。

ポスター展示では、多賀城市での元気市の様子など震災時の各支部の活動の様子も紹介されていました。私たちも支援へのお礼のポスターを作成し、掲示いただきました。

翌27日総会では福島の塩野支部長が「うちの会員やお母さん方が、全国に避難して皆さまのところでお世話になっていると思います。どうかどうかよろしく。」とあいさつなさって、涙が出そうでした。

宮城の代議員として、選挙と審議に参加させていただきました。例年のない重要議案として、会員の除名決議がありました。事故をおこしたとしても同じ会員として守るべきだという意見も多数出ました。しかし重大事故のリピーターということで、一旦は懲戒処分として2年間の研修ののち分娩取り扱い再開を提案されたのですが、本人からの弁明なく研修の提案も受け入れられなかったという経緯があったそうです。そして今回、賠償保険の掛け金上昇問題や、会員の質の保証を保つ社会的責任を果たすべきという意見が通り、除名という重い決議がなされました。

最終日の助産師学会では、とも子助産院より「当助産院における分娩状況と臍帯血液ガス値分析の関連性の検討」について発表させていただきました。その他、興味深い発表として、福井大学医学部看護学科の瀬戸知恵さんらによる「分娩時外陰部消毒のあり方の検討ーわが国の実態および水道水を使用した方法を実践している日英5施設の現状」の発表がありました。10数年来、分娩前に消毒をしないか水道水のみを使用していて問題がなかったという調査報告です。消毒剤の使用見直しについてリーフレットを作成し全国の産科施設に配布予定との積極的な計画もあるようでした。

帰仙したとたん余震つづきで、現実に引き戻されましたが、この数日間は、地震のない地域で過ごし、お産で起こされることもなくとても安眠でき幸せでした。さまざまな団体・個人よりご支援いただき当会も、会員同士力を合わせ、宮城のママたちとともにふんばっていかなくては！と深く思いました。



宮城県の母子は皆被災者です 支援の輪を広げたい!!

まんまはうす 武者文子

今震災後に、当助産院を訪れた母親たちの声を集めてみました。やっと復旧したかと思える仙台市においても、このように震災の影響は深いものがあります。支援の輪を広げ、すべての母子に助産師のケアを提供できるよう願っています。

- ・自宅のドアが閉まらなくなり、赤ちゃんの泣き声が近所迷惑にならないようにずっと抱っこしている。ひどくつかれている。
- ・放射能が心配で母乳を子供に飲ませていいかどうか。でもミルクにはしたくない。・・・これはすごくたくさんの方が電話でも来所でもきいてくる。「武者さんが逃げる時には私も逃げるので、必ず連絡くださいよ。」と念を押す人もいる。泣きながら電話してくる人も何人もいました。
- ・アパートの被害が大きく他の部屋に引っ越した。他のアパートに引っ越した。
- ・自宅に地震後から親戚がきているので気を使う。
- ・実家が流された。
- ・夫が公務員で忙しく育児の協力が得られない。
- ・夫が警察官で忙しく育児の協力が得られない。
- ・夫が自衛隊員で休みの日しか家にいない。
- ・夫の収入が減った。
- ・夫の仕事が減った。職場が半壊しているが直せない。たぶん今年中に倒産すると思う。
- ・また地震がきたら子供たちをどうしようかいつも考えている。

- ・上の子が地震と津波を怖がり甘えがひどい。
- ・仙台市内で出産する人が増えたせいでお産が多くて入院中に手をあまりかけてもらえなかったと感じている。病院からも今後は開業助産師に相談してと、助産師マップをわたされた。
- ・近くの産院では、震災中のクリニックの閉鎖でクリニックの収入が減り、スタッフが減り、外来が忙しそうに相談がしづらい。7月から三交代から二交代になり、辞めるスタッフもいてますますケアが足りなくなりそう。
- ・産院で当直をしていた助産師が放射能の影響でやめてしまった。代替りの助産師を雇えないみたい。
- ・またいつ地震がきてもいいように赤ちゃんのおなかをいつもいっぱいにしていてくれてミルクを足していたら母乳がでなくなった。
- ・震災後から母乳の出が悪い・・・これはたくさん相談されました。
- ・混合栄養だったが震災の時大変だったのでなんとか母乳を増やしたい。
- ・震災の時にお金たくさん使ってお金がない。・遊ばせるところが少なく毎日子供と家においてストレスがたまる。
- ・放射能をできるだけ浴びないように外出を控えている。

最近ではあちこち転々として9か所目でやっと落ち着きました。というママに会いました。生後1か月の赤ちゃんを連れて大変だったそうです。泉区のアパートで落ち着いたと思ったら4月7日の余震で借りたばかりのアパートに赤紙はられて立ち入り禁止で住めなくなり、2週間しか住んでいなかったのに礼金は戻ってこなかったそうです。

EPDSが24点のお母さんにも会いました。死んでしまった方がいいと考えることも多いそうです。

沿岸部から離れたところを希望して太白区に落ち着いている方も多く、新生児訪問で一日で伺った三家庭が全て沿岸部からの転入者だったという日もあります。

三か月经ちましたが、震災の影響はかなり大きいと感じています。

このようなお母さん達への助産師によるケアが一回でも無料で、もしくは割引でもしてあげられたら、相談に来たお母さん達はすごくうれしいと思うのです。

編集後記

被災後の事務処理に追われ、また専門学校、大学の講義が5月の連休明けに集中し、補講続きが続いています。こんな中、本部からの8月号に投稿依頼があり、この一部を宮城県便りとししました。また、この大震災復興期に、飛行機が飛ばずとも宮城県を代表し全国総会に行って下さった、後藤美子副会長、伊藤朋子事故対策委員、2名の会員に感謝し参加報告を載せました。また、お忙しい中、仙台における母子さんのご様子をお知らせ頂いた、武者文子さんのメールの内容を掲載許可を頂き、載せました。今後の長期に及ぶと思われる母子支援事業に生かしていきたいものです。

書記 田村雪子